

○助顕

『無量寿如来会』にのたまはく、「阿難、仏にまうしてまうさく、へ世尊、われ如来の光瑞希有なるを見たてまつるがゆゑにこの念を發せり。天等によるにあらず」と。仏、阿難に告げたまはく、「善いかな善いかな、なんぢいま快く問へり。よく微妙の弁才を觀察して、よく如来に如是の義を問ひたてまつれり。なんぢ一切如来・応・正等覺および大悲に安住して群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとくして大士世間に出現したまへり。ゆゑにこの義を問ひたてまつる。またもろもろの有情を哀愍し利樂せんがためのゆゑに、よく如来に如是の義を問ひたてまつれり」と。以上

10 『平等覺經』にのたまはく、「仏、阿難に告げたまはく、へ世間に優曇鉢樹あり、ただ実ありて華あることなし。天下に仏まします、いまし華の出づるがごとしならくのみ。世間に仏ましますも甚だ値ふことを得ること難し。今われ仏になりて天下に出でたり。なんぢ大徳ありて聰明善心にして、あらかじめ仏意を知る。なんぢ忘れずして仏辺にありて仏に侍へたてまつるなり。なんぢいま問へるところよく聴き、あきらかに聴け」と。以上

15 『無量寿如来会』・・・後期無量寿經、菩提流支訳（唐訳）、『無量寿經』と同じ四十八願經系統。宗祖は本經に注目されており、異訳大經の中でも引用数が最も多い。

20 「善能視察」等とは、魏訳にあたれば、「善能視察」の四字は、「深智慧」にあたり、「微妙弁才」の四字は「真妙弁才」に当たる。そのときは、「よくよく視察し、真妙の弁才をもって」と読むべきなり。現流の『如来会』にはかくのごとく訓じてある。しかるにいまの御点は「真妙の弁才を視察して」とあり、この時は「真妙弁才」とは仏に属す。「善能視察」は阿難に就く。如来に真妙の弁才ましますことを觀察知するが故に、「如是之義」と問ひ奉る。この問に依つて如来、真妙の弁才を述べて、「恵以真實之利」の真實教を説きたもう。（善謙『敬信記』）

「如是の義」

25 初めに証信といふはすなはち二義あり。一にはいはく、「如是」の二字はすなはち總じて教主を標す。能説の人なり。二にはいはく、「我聞」の兩字はすなはち別して阿難を指す。能聴の人なり。ゆゑに「如是我聞」といふ。これすなはちならべて二の意を釈す。また「如是」といふはすなはち法を指す。定散兩門なり。「是」はすなはち定むる辞なり。機、行ずればかならず益す。これは如来の所説の言に錯謬なきことを明かす。ゆゑに如是と名づく。（『觀經四帖疏』「序分義」／「七祖篇」三三六）

35 三經の大綱、顕彰隱密の義ありといへども、信心を彰して能入とす。ゆゑに經のはじめにもつて金剛の真心を最要とせり。真心はすなはちこれ大信心なり。大信心は希有・最勝・真妙・清淨なり。なにをもつてのゆゑに、大信心海はなはだもつて入りがたし、仏力より發起するがゆゑに。真實の樂邦はなはだもつて往き易し、願力によりてすなはち生ずるがゆゑなり。（『化身土文類』三九八）

40 ☑ 「如是の義」、すなわち仏陀の真實は私の上には他力の信となつて顕れる。

如来の光瑞希有にして 阿難はなほだころよく
如是之義ととへりしに 出世の本意あらはせり (五六五)

5 「なんぢ一切如来・応・正等覚および大悲に安住して群生を利益せんがために、優曇華の希有なるがごとくして大士世間に出現したまへり。ゆゑにこの義を問ひたてまつる」

☑阿難の問いによって諸仏の願いが明かされる

『平等覚経』・・・初期無量寿経で二十四願経系統。二〜三世紀後半の訳出とされる。

10 訳者については支婁迦讖、支謙、帛延、竺法護などの諸説あるが確定されてはいない。(漢訳)

「優曇華」

かくのごとく妙法諸仏如来、時にいましこれを説く。優曇鉢華の時に一たび現わるがごとし。『法華経』／『大正蔵』九、七)

15 優曇華とは此には靈瑞と言ふ。三千年に一たび現ず。現ずれば則ち金輪王出づ。三乗の調熟已後方に妙法を説き法王の記を授くるを表す。又酪・生蘇・熟蘇の三味を隔跨して已後乃し醍醐を説く云云。(智顛『法華文句』／『大正蔵』三四、四九)

20 如来興世の本意には 本願真実ひらきてぞ

難値難見とときたまひ 猶靈瑞華としめしける (五六六)

※「靈瑞華」に「優曇華の咲くことの稀なるが如くなり」と左訓

☑「甚難得値」 あり得ないことがあり得ている。遇法の慶び

25 ここに愚禿積の親鸞、慶ばしいかな、西蕃・月支の聖典、東夏・日域の師釈に、遇ひがたくしていま遇ふことを得たり、聞きがたくしてすでに聞くことを得たり。真宗の教行証を敬信して、ことに如来の恩徳の深きことを知んぬ。ここをもつて聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。(『総序』一三二)

30 初め「如世間」等とは譬説の意を詳にし、「若有」等は阿難よく仏意を領することを助顯するなり。(『本典研鑽集記』上、六八)

35 上来所引三経の文、これを概括してみれば、初めの『大経』に撰まる。『如来会』『平等覚経』はその引くところの文は、まさしく阿難を嘆ずるの文なるのみ。『大経』には如来の現相あれども、これただ魏訳のみにして、余の二経にこれなし。故に阿難の功を称美するもの、如来現相よりも多く称美するはいかんと云うに、三経を引きて阿難の請問をつぶさにせしものは、真実経を顕さんためなり。阿難なくんば如来奇瑞の相を現じたる相見えぬ。阿難の問いがありし故、現相あらわに知れたり。かく顕露に知られたるが故に、真実教明らかに知るを得るなり。ここを以て阿難の問いを嘆ずるが真実教を開くの御手振なり。依つてこの三経の文を引くが、すなわち出世の大事たる真実教の明証助顯に備わるなり。

(善讓『敬信記』)